

# 端島炭鉱「軍艦島」の生活

A study of life at Hashima colliery

井上 博登

## 1. はじめに

本稿は、近年端島炭鉱（俗称「軍艦島」、以下文脈により適宜使いわけ）に世間の注目が集まり当時の生活の様子に関する情報が求められているという状況のなかで、どのような情報を当時の「生活」として語り、どのように記録・提供・公開していくべきかに関して考察するものである。

筆者はこれまで十数名の元端島住民への聞き取りを重ねており、本稿ではこれらの具体的なエピソードを紹介しつつ、端島炭鉱（「軍艦島」）での生活に迫っていく。

なお、ここでは当時「外勤」や「詰所」（後述）という島内を常に巡回して歩き、労働者の生活管理・労務管理をおこなう役職に就いていた元住民へのインタビューを取りあげる。端島炭鉱での「生活」において、この「外勤」や「詰所」が重要な役割を果たしていたからである。端島炭鉱での生活を語るうえで、これらの「外勤」「詰所」の果たしていた生活管理・秩序維持の機能に触れなければ、それは片手落ちというものであろう。

## 2. 炭鉱社会の「生活」をめぐる「典型的な語り」

端島炭鉱に限らず、炭鉱社会に関する典型的な語り（及びそれによって喚起されるイメージ）といえ、ある程度人口に膾炙しているのではないだろうか。ごく簡単にあげると、それは「炭住や長屋での生活は隣近

所で家族同然の親密なつき合いをしていた」とか、「家賃・電気代・ガス代・水道代などがほとんどかからず住みやすかった」とか『「一山一家」の精神で団結力が強い」といった類のもので、基本的に炭鉱での生活を肯定的に語るものである。端島炭鉱の場合も、元住民からはこれと類似した「典型的で肯定的な」語りを多く聞くことができる。

また、近年端島炭鉱（「軍艦島」）が世間から注目を浴びるなかで、TV・新聞などのマス・メディアによってこれらの典型的な語りが再生産され流通している。

しかし、本稿でアクセントをおきたいのはこのような典型的な語りを再生産するだけではなく、それに回収されることのない端島炭鉱での「生活」の多様な側面に着目することである<sup>(1)</sup>。閉山後35年を経た現在の地点から端島炭鉱の「生活」を記録・提供・公開していくとき、いわゆる炭鉱社会についてよくいわれるような典型的な語りに終始するのみならず、この生活の多面性に留意する必要がある。

それはたとえば、本稿で取りあげる「詰所制度」（後述）からみた端島や、高浜<sup>(2)</sup>との関係からみた端島、（マジョリティの鉱員層ではなく）下請け従事者からみた端島、商売人からみた端島、等々の多様な端島像である。これらの、炭鉱社会の特質や地域社会との接点に着目する視点を確保することによって、炭鉱社会への関心を一過性のステレオタイプなものに矮小化することなく、また現在の旧産

炭地という文脈における地域社会への連続と断絶を明らかにしていく視座を担保することができるのである。

### 3. 端島炭鉱（「軍艦島」）の概要

端島炭鉱（「軍艦島」）（長崎県長崎市）は、長崎港から西南約18 kmの洋上に位置する元海底炭鉱の島である。江戸時代末期から露出炭の存在が知られており、明治時代に入ってから炭鉱としての開発・経営がなされた。明治23年（1890）に同じく三菱の経営であった高島炭坑の支鉱となった。鉱区は端島直下1,000 mを超える海底に数km<sup>2</sup>に渡って層状に存在し、最盛期（1941）には年間41万tを超える出炭量をみた。主として八幡製鉄所にむけて良質の製鉄用原料炭を供給し、1974年の閉山まで操業を続けた。

大規模な鉄筋コンクリートアパート<sup>(3)</sup>が建設されるに伴って島内の許容人口も増加していき、最大人口を要するようになる昭和30年代頃には島内人口が5,300人を超え、人口密度が1 haあたり1,400人を超す世界有数の超高密度人口の島となった。

操業時には、小さい島内に「ゆりかごから墓場まで」の生活に必要なあらゆる施設が存在しており、島内でひとつの完結した生活空

間が用意されていた。

閉山後しばらくは三菱マテリアル(株)が島の所有権をもっていたが、2001年に高島町に無償譲渡され、その後2005年1月に高島町が長崎市に編入合併したために現在は長崎市所管となっている。

### 4. 観光上陸ツアーでの語り

「軍艦島」は、2009年4月22日に観光上陸が解禁され、その後船舶を使った上陸ツアーが実施されている。NPO法人 軍艦島を世界遺産にする会所属の上陸ツアーのガイドも行っている元住民A氏（1954年生）への聞き取りをもとに、上陸ツアーでの端島炭鉱（「軍艦島」）に関する語りの特徴を下記にあげる。

1. ガイド自身は端島生活歴が短く（あるいは生活した経験がなく）、端島炭鉱（「軍艦島」）の多くの事柄を自身の経験として語ることはできないわけではない（出版物等外部からの情報も多い）
2. 炭鉱としての側面や労働現場に関する話は極めて少ない
3. 比較的自分自身や近い世代の経験として語ることで、住宅での日常生活のエピソードが多い。それらはユー

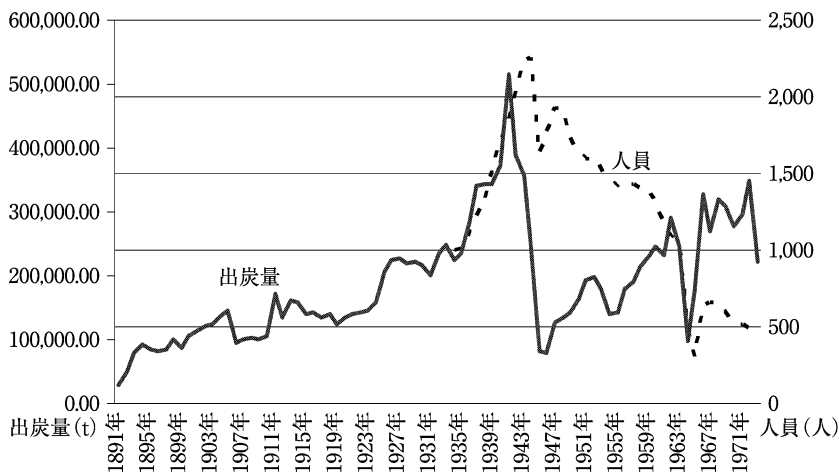


図1 出炭量・人員数

出所：『高島炭鉱史』、『端島（軍艦島）』をもとに作成

モアをまじえて肯定的に語られる

4. 「修学旅行生」や「年配の方」等、相手を見てふさわしいと思われる話の内容(シナリオ)をその場その場で即興的に語る
5. 「軍艦島」を舞台として、エネルギー政策の転換によってうち捨てられた島としての側面を強調し、化石燃料に依存する日本(または現代文明)の未来を暗示しているかもしれないとして「軍艦島」を教訓として現在・未来の日本のエネルギー問題・環境問題について考えることを促す。またそのための意義ある存在としての「軍艦島」を強調する

ここでは、なにが語るべき(伝えるべき)「端島像」「軍艦島像」「生活」として選ばれているのか、ということが問題となってくる。

## 5. 炭鉱社会の特質を描く

### 5-1. 「詰所制度」(詰所・外勤・寮係員)

そこで、以下本稿では必ずしも「典型的な語り」のみにとどまらない端島生活の多様な側面を実験的に取りあげ、そこから「生活」を描いていくことの可能性について考察を試みる。たとえばこのような元住民による具体的なエピソードが蓄積されていけば、厚みのある端島炭鉱(「軍艦島」)での「生活」の様子を想起できるようになると思われる<sup>(4)</sup>。

まず、「詰所」「外勤」を取りあげる。

「詰所(制度)」<sup>(5)</sup>は炭鉱特有の生活管理のシステムで、地区ごとに「詰所」<sup>(6)</sup>(端島では社宅の地上階の一室)が設置され、地区内に住む鉱員や家族たちの労務管理・生活管理と福利厚生を担っていた。詰所は会社の総務課の管轄下におかれ、職員である区長と事務方の係員が駐在していた。

また、地区内を常時巡回して異状がないか点検し、外部者の無断侵入や鉱員の出入りを

監視したり、住民からの情報収集をおこなって詰所にもって帰る役割の「外勤」という職制がおかれていた。詰所に集まってくる情報や「外勤」の収集してくる情報によって、詰所では地区内住民のかなり詳細で多岐にわたる生活上の情報を把握していた。このような形で鉱員たちの生活管理まで行うのは、ひとえに出稼率を上げるためであった。

「外勤」は問題(たとえば喧嘩や施設の損壊箇所等)を発見すると、それが大事にならないうちに未然に解決した。端島炭鉱には警察官が1、2名駐在しており、たとえば喧嘩などがエスカレートして大事になれば警察が処理しなければならなくなるが、「外勤」は警察が出てくる前にトラブルを未然に解決するという役割も担っていた。この「外勤」職従事者は、仕事柄ほとんどの鉱員の生活事情や家庭事情を把握しており、端島炭鉱の坑外の情報にもっとも精通していたといえる。

### 5-2. 「外勤」従事者のエピソードから

以下では、端島炭鉱でこの「外勤」職や寮係員等に従事したことのあるU氏(1920年生)の語りから、特徴的なものをピックアップして考察する<sup>(7)</sup>。(以下、引用中の( )内は筆者注)

#### <事例1>

社宅の内情を知るためには(島民の家を)回りよつたと。必ず一軒一軒。そうずっと(玄関を)あけてそれを見て、この奥さんはきちんとした奥さんだ、(あるいは)ズンダレ(怠け者)だっているのがね、わかるの。炊事場のあれ(散らかり具合)を見たりとかね。

⇒一軒一軒の家を回りながら、炊事場や部屋の散らかり具合を見てその家の奥さんが働き者か怠け者かを推測し、夫の鉱員の勤務状況と照らし合せている。奥さんがきちんと

と片づけている家は、夫の鉦員の勤務状況も良好とのことであった。まさに外勤・詰所係員による生活管理の特徴をいいあらわしている。

#### 〈事例 2〉

休みのときはこげんあるから休ませてくれて欠勤届も嫁さんがもってきたり、本人がもってきたりね、家族がもってきたりしよったと。そして、あんまりズベラ（怠け者）んとこはたまに行ってもやかましくしてね、一週間に一回中休みくらいはね、坑内の勤務やからキツイからやかましくいわんと。だけど一週間に二つも三つも休むときは、仕事に行けよと、お前ひとりの生活じゃなかろうかと、家族のためにも働かねばいかんとっていい聞かせてね。

⇒勤務状況のよくない鉦員に対して、「おまえひとりの問題ではなく、家族（奥さん・子どもたち）の生活がかかっているんだから（もっとまじめに働きなさい）」という説得の論理は、U氏の話の中でしばしば聞かれる。ここでは（ほかの）詰所係員の言動としても出てくるので、外勤も含めた詰所制度全体のやり方として、このような説得方法が採用されていたのかもしれない。世帯持ち鉦員には「家族」の存在を強調しているが、独身の寮生に対しては、「遊び」に連れて行ってやったり、金を個人的に前貸ししてやったりして個人的な「信頼」と「恩義」の念を抱かせることによってまじめに勤務させるようにしていた。

#### 〈事例 3〉

禁止禁止。（花札の賭博は）会社から禁止されていた。（でも寮生たちは）隠れながらこっそりやっていた。でも、もうやるところは大体わかっていたからね。3

番方のところを回って行って、入り込んで……（ときには自分も参加したりして、やりすぎるなよと注意した）。

⇒会社は花札による賭けを禁止していたが、外勤であるU氏は当然そのことを知りながらも杓子定規に取り締まるのではなく、逆に時折自分も花札の輪に加わってさりげなく様子をみながら、「少くくはいいがあまりやりすぎないように」と注意する。このような関係を築いていけば、寮生もU氏に対して単なる会社側のやかましい取締者とみるのではなく、自分たちの事情をわかってくれている話のわかる信頼のおける人とみなすのではないだろうか。機械的な厳しい管理ではなく、こういった信頼関係こそが結果的に生活改善を促し、労働意欲を高めるということをU氏は個人的な経験から熟知していた。当然このような付き合い方・対処法は職務の方法として決められているわけではなく、U氏が会社の規則に反してまで個人的な創意工夫にもとづくやり方を実践していたことは重要である。ここでは、管理する側と管理される側というような截然とした線引きはなく、お互いに生身の人間同士としての情や恩義・信頼に基づく関係が構築されていた。

⇒「やかましくいうだけではなく、寮生や鉦員が困っているときには世話をしたり助けてやりしてやる」というのが、寮生・鉦員の心をつかみ結果的に生活が改善されて勤務状況もよくなるという効果をもたらす、生活管理の核心といえるだろう。とくにU氏の場合個人的な創意工夫が多々みられ、ときには会社の規則違反になるようなことでも個人の裁量で実行していた。これが、U氏の役職選挙時の人気（地区委員・駐在員等、後述）に結びついていたと思われる。

## 〈事例4〉

普段のね、社宅の人と詰所の人との付き合いは綿密にしておいた方が、そういう関係があれば、出稼率もあがるしね。頼まれたことはしてやる、相談事でもあったら、のってやるというようなこともね、日常の世話もちゃんと見てやりよったからね。そういう関係で出稼率もよかったとよ。詰所ごとの出稼率のパーセントを見ればね、僕なんかいたときはね他所よりも5、6%は上だった。

⇒会社は各詰所の担当地区ごとの出稼率を公表し、各地区・各詰所同士を競わせていた。詰所関係者は担当地区の出稼率を上げるために躍起になっていたといえる。担当地区の生活管理が行き届いていれば、結果的に出稼率はあがった。

## 5-3. 会社・労働組合・自治体の一体化

先に、「詰所制度」が端島炭鉱での「生活」に与えていた影響の大きさに言及したが、情報網や人間関係のネットワークという意味では、労働組合や自治体関係の役職も関係していた。各職制や役職の関係を整理すると、それぞれ会社関係として詰所、労働組合関係として「地区委員」、自治体関係として「駐在員」ということになる。そして、これらの職制や役職は、同一人物が2重3重に兼任することが多々みられた。筆者が聞き取りを行ったU氏も、外勤・詰所関係の仕事をしつつ、労働組合の地区委員、行政の駐在員を長く兼任していた。

つまり端島炭鉱では、会社・労働組合・自治体が一体となって、情報なり人間関係なりのネットワークが隅々まで張り巡らされていたといえるだろう。

## 5-4. 条件に規定された「住みやすさ」—社宅

次に、視点を転じて「典型的な語り」でよ

く耳にする端島炭鉱での「住みやすさ」を保障していた社宅について考察を加える。

端島炭鉱の社宅には細かい入居基準や社宅管理規定が適用されており、住み続けるためにはそれらの条件を満たしていなければならなかった。たとえば根本的な条件として、社宅に住むためには世帯内に端島炭鉱に正式に雇用されている男子在籍鉱員がいなければならなかった（男子在籍鉱員しか社宅借用者になれなかった）。基本的に土地の狭小な端島では、社宅に住むことができないということは島から出ていかなければならないということにつながる<sup>8)</sup>。

そのため、元住民からの聞き取りでは、鉱員だった父親が亡くなった後母親が端島炭鉱在籍の鉱員と再婚し、その後も端島の社宅で暮らしたという話も聞く。また、鉱員だった父親が定年退職した後、間をあげずにすぐにその息子が端島炭鉱に入籍したという話も聞く。その場合、息子が炭鉱に在籍していれば定年退職した親夫婦も引き続き端島の社宅で暮らすことができた。このようなケースが多かったというようことはいえないが、少なくとも社宅という条件付けられた住居であるが故に、住人たちの結婚や就職といったライフイベントへある程度の影響を与えていたと考えることができる。

また、端島炭鉱の社宅に住むことの魅力として電気代・ガス代・水道代・家賃等の「生活基本料金がタガ同然」という条件があげられる。これは、鉱員への福利厚生として炭鉱の社宅（炭住）であればごく一般的なことである。しかし、たとえば端島炭鉱に住んでいたものの鉱員ではなかった人々（たとえば商売人等）の立場から語れば、また違った語り口となってくる。

父親が端島炭鉱で食堂を経営していたB氏（1944年生）によると、食堂が社宅の一角にあったため自分たち家族も一応社宅（の建物）に住んでいたことにはなるが、鉱員とは待遇

が異なり、間取りなども改装を加えたりして異なっていたという。また鉱員の社宅入居者であれば、勤続や勤務態度から計算される点数にもとづいて引越しを行う「点数制度」のもと、かなり頻繁に引越しをくり返すことが多かったが、上記B氏は食堂経営のため長年引越しを経験していない。端島の元鉱員（家族）からはこの頻繁な引越しに関するエピソードは共通経験として語られることが多く、その点B氏はこの端島炭鉱鉱員の共通経験を共有していない。

またたとえば、端島から長崎へ出る時に船に乗るが、その時にも鉱員は廉価な船賃で乗船できたが、商売人等の鉱員以外の人々は毎回正規船賃を払わなければならなかったという。

このようないくつもの細かい差異が、端島炭鉱での社宅生活を一枚岩的に語ることへの留保を投げかけているといえよう。

## 6. 小 括

本稿の目的は、昨今の「炭鉱リバイバル」（中澤論文2.2参照）ともいふべき状況のもと、筆者が行ってきた元端島住民へのインタビューにもとづいて、より具体的で多様な関係性のなかにあった端島炭鉱（「軍艦島」）での「生活」を提示することであった。

たとえば、炭鉱に関する出版事業やイベント、観光上陸時のツアーガイドの場面等において、いわゆる「典型的な語り」だけではなく、これまで述べてきたような具体的で多様な関係性を想起させるような語り（それはしばしばよい面だけではなく負の側面にも触れることになる<sup>(9)</sup>）をも記録・記憶し語り継いでいく必要があると考える。それは、簡単にいえばよい面も悪い面も含み込んだ両義性・二面性を否定しない語りであり、端島の生活像の提示である。

しかし一方でこのようなよい側面だけでは話や個人的な情報を多く含んだ話は、提

示の仕方が難しい。アーカイブと記録に関して、これまで述べてきたような「生活（の語り）」をどのように記録し公開するのかという問題は依然として残されている。

いずれにしても、端島炭鉱に限らず広い意味で旧産炭地の「地域再生」（中澤論文2.3参照）という課題と向き合うとき、まずはかつての炭鉱社会の特質を正確に把握し、それが現在の地域社会とどのように連続／断絶しているかという様態を俯瞰することが重要である。本稿では、ささやかながら端島炭鉱を事例として、「詰所制度」や社宅という炭鉱社会の特質を体現する要素から「生活」のとらえ方に関する考察をおこなった。炭鉱社会の特質がどのように地域社会と連続／断絶しているのかという問題は、今後の課題として稿を改めて考察したい。

## 注

- (1) これらの典型的な語りは元住民の多くがまず最初に率直に語ってくれるところのものであり、その重要性に疑いを差しはさむものではない。
- (2) 端島の対岸に位置する村落で、端島向けの野菜の供給地としての役割を担っていた。
- (3) 大正5年（1916）以降は、それまでの木造平屋や2階建の長屋とは一線を画した高層の鉄筋コンクリート造のアパートが次々と建設されていった。当時の日本では、高層の鉄筋コンクリート建築はいまだ実験の段階にあり、1916年にたてられた30号棟は日本初の高層鉄筋コンクリート建築として日本建築史上貴重な建物となっている。
- (4) とはいえこれらのエピソードは端島特有というものでもなく、ある程度炭鉱社会に特徴的で共通したものであると思われる。
- (5) ここでは詰所やその機能の一部を担っていた「外勤」を含めた、端島炭鉱における生活・労務・情報の管理を取りまとめていたネットワーク的機能を仮にシステムとしての「詰所制

度」と呼んでみることにしたい。詰所自体は制度ではないが、それが受けもっている多種雑多な業務と、それを会社や外勤など上位・下位のアクターと常に交換しながら連携し、全体的な生活管理を可能にしている様子は、ある種の「制度」とみて差し支えないであろう。

- (6) 常盤炭砦や北海道では「世話所」と呼ばれていた。
- (7) 以下の事例と解釈は、(井上, 2007)より引用。U氏へのインタビューは2005年におこなった。
- (8) もっとも社宅入居に関する諸規則は原則的なものであり、島内人口の多寡(=空き部屋の多寡)や親類縁者の協力等によってはなんとかなることもあったようで、場合により柔軟な対応もとられたようである。
- (9) 卑近な例だが、端島の日給社宅(9階建)では窓を開け放つと横に並ぶ部屋が丸見えになってしまう。それでも夏の暑い夜には、一戸が窓を閉めてしまうと風通しが悪くなって全戸に迷惑がかかってしまうため、プライバシーを度外視しても窓を開け放つようにしたという。当然、視覚的にも聴覚的にもプライバシーが洩れてしまうのだが、お互いにそのことに関してとやかくはいわないような暗黙の配慮があったという。これを近所の仲がよく団結していたと捉えるか、プライバシーのない窮屈な環境だったと捉えるかは、その人の端島生活への

感情に左右されることでありどちらともいえない。

#### 参考文献

- 阿久井喜孝・滋賀秀実(2005)『軍艦島実測調査資料集 大正・昭和初期の近代建築群の実証的研究【追補版】』東京電機大学出版局
- 井上博登(2007)『「軍艦島」の生活誌』早稲田大学大学院人間科学研究科提出修士論文
- 片寄俊秀(1974 a)「軍艦島の生活環境(その1)」『住宅』Vol.23 No.5, 65-71. 日本住宅協会
- (1974 b)「軍艦島の生活環境(その2)」『住宅』Vol.23 No.6, 95-106. 日本住宅協会
- (1974 c)「軍艦島の生活環境(その3)」『住宅』Vol.23 No.7, 54-63. 日本住宅協会
- 三菱鉱業セメント株式会社高島炭礦史編纂委員会(1989)『高島炭砦史』三菱鉱業セメント
- 高島町教育委員会(2004)『端島(軍艦島)』高島町教育委員会
- 武田良三ほか(1963)「炭砦と地域社会 常盤炭砦における産業・労働・家族および地域社会の研究」『社会科学討究』22・23・第8巻・第2・3号合併号 早稲田大学社会科学研究所